こころの未来　32

鎌田　東二
京大こころの未来研究センター教授

安保法案強行採決の愚と神の島のいのちのメッセージ

秘められた声を聞く

未来を切り開くために

安保法案強行採決に国民的猛反発が起こり、安倍政権の支持率が急激に下がっている。日本が集団的自衛権の行使にかじを切り、「平和憲法」と呼ばれる「戦争放棄」をうたった非暴力主義の憲法第9条を骨抜きにする法案に対して、NOを突き付ける多くの国民が国会議事堂前をはじめ、各所でデモをし、集会を開き、ネット上で反対署名を呼びかけている。

だが、現政権はそのような国民の声に耳を貸そうとしない。なぜか？　もちろん、米国の議会で安倍首相が大見えを切って米軍を支援する約束をしてきたからだ。国民の意思を無視して強行突破を図ろうとする自民・公明与党の政治的横暴は民主政治の根幹を揺るがす事態にまで至っている。

同様の事態が沖縄であった。米軍の普天間基地の辺野古移転に対して多くの沖縄県民がNOを突き付けた。だがこれにも現政権は耳を貸さなかった。米国との約束を最優先したからだ。実質的には日本国憲法の戦争放棄などは有名無実化し、日米地位協定に基づいて沖縄がアジアにおける米国の軍事戦略拠点として有用な地政学的役割を果たしてきた。米国の世界戦略において日本はまだ使える国なのである。その支配下にある限り、日本の自由も独立も民主主義もない。多くの人が指摘しているように、日本はうわべは米国流に「自由民主」をうたっているものの、実質的には真の自由も民主も独立もない。属国的支配と圧力を受け続けている国である。

6月1日付で、「基地の島と神の島」と題する記事を寄稿したが、その後「神の島」と呼ばれる「久高島」を12年間ドキュメントした「久高オデッセイ」三部作が完成し、7月5日に東京両国の劇場シアターXで初公開された。300席で満席のところ、立ち見が出る盛況で新作「久高オデッセイ第三部　風章」は絶賛され、大反響を巻き起こした。

だが、大重潤一郎監督はこの7月22日に死去した。5日の上映会では自分のベッドと劇場とをスカイプでつなぎ、大スクリーン上で鋭く痛烈な言葉を吐き、たばこをふかして、観衆の度肝を抜いた。それを見た誰しもが、これが末期がんで死にかけている人の姿とは到底思えなかっただろう。

大重は1946年、薩摩半島南端の坊津に出自を持つ海の一族の末裔として鹿児島市で生まれた。生涯海を愛し、海のエロスに感応しながら、「海人」として生をまっとうした。岩波映画で学び、70年に風変わりな劇映画「黒神」でデビュー。その独創的な作品は黒木和夫監督に「十年早い傑作」と称されたが、まったく大衆受けすることはなかった。

しかし東日本大震災後、その「黒神」の真価が評価され始め、自然派である大重映画の徹底した表現と訴求力が、若者や未来の生き方の転換を模索する人たちに広がり始めた。大重は遺作となった「久高オデッセイ第三部　風章」まで、一貫して大自然の中でつつましくもたくましく、けなげに生き抜いていくいのちの輝きと祈りと祭りとエロスを描いてきた。

「気配の魔術師」大重の映像のエロチシズムは澄明で永遠性を感じさせるリリシズムをあふれさせている。「久高オデッセイ」という名称が物語るように、大重は「オデッセイ」という叙事詩をうたう吟遊詩人であり、映像の詩人であった。

その映像詩は、95年の阪神大震災の経験で深められた。大阪に事務所を構えていた大重は震災後、家族の住む神戸の自宅に向かって歩いた。高速道路がへし折れ、ビルも民家も倒壊し粉じんが上がり、無秩序な瓦解した黙示録的な終末世界のような光景が広がっていた。

その信じ難い廃虚の破局的光景の中でも、アスファルトからタンポポが芽を吹き出すいのちの営みがあった。大重は猛然と「光りの島」の編集に取りかかり完成させる。このアスファルトの地面の下には縄文時代から続いているいのちが埋蔵されている。大重の野生の感覚はそのことを見逃さなかった。そのいのちを取り戻す！

「光りの島」は廃虚となった神戸とポジとネガの関係にあり、大重の死生観が表出されている。沖縄の無人島（新城島）の島の光と風にさらされ、見えないモノを見、聴こえない声を聴き、「いのちの帰趨」に触れて、その根源に響く「母の声」を聴く。

死去する前に「聖者の行進をする」と言って何度も立ち上がり歩こうとした大重は海のかなたのニライカナイに行進していった。今、その大重の映像詩を、日本を代表する詩人吉増剛造が自作詩に変換しようとしている。このきな臭い状況にあってこの2人の詩人の「いのちのメッセージ」を聴き取る聴覚こそが未来を切り開く力になると信じている。

（阿南市出身）

総論★各論　■7月■

憲法論ばかり先行　安保法案　国会論戦

安全保障関連法案が衆院を通過した。与党の採決強行を主導した安倍晋三首相までもが「国民の理解が進んでいない」と認める国会審議について、専門家は「憲法論ばかりが前に出て、肝心の外交や安全保障が議論されていない」と指摘する。

筑波大名誉教授の進藤栄一「『人間の安全保障』を実現する外交戦略」（「潮」8月号）は集団的自衛権について、「覇権国がその国益と覇権秩序の維持強化のために結ぶ」軍事同盟の国際法的な根拠とするべく国連憲章に付け加えたのが始まりだと指摘。日本が今、その行使容認を通じ日米同盟を強化する意義があるのか、と首をひねる。

「ヒトとモノとカネ、情報と技術」が容易に国境を越えるグローバル化が加速し、各国の関係はいや応なく緊密化していると指摘。軍事的な領土拡大が国益を増大させる時代は終わったと説く。

「突き詰めれば、『冷戦期の議論の残滓』と言わざるをえない」と日本総合研究所理事長の寺島実郎は突き放す。「戦後七〇年の夏、日本外交の貧困」（「世界」8月号）で「いくら法制度を整備して『戦える国』にしても、若者が『守るに値する国』と思える状況を創らねば機能しない」。

時代遅れの議論をさらに複雑にしたのは、憲法を改正せず解釈の変更で集団的自衛権に踏み込んだ安倍政権の手法が原因だと批判。違憲論を意識して現行憲法の枠内に限定された法案は、必ずしも集団的自衛権の行使を必要としない「全ての当事者が首を傾げるファジーな内容」となり、その解釈の恣意性が違憲論の連鎖を招いたとみる。

「実際には殆ど使えない法律」と断じたのは、東大政策ビジョン研究センター客員研究員の三浦瑠麗だ。自身のブログ「山猫日記」（7月12日、22日更新分）で、法案の狙いは集団的自衛権の行使を容認することの一点にあると分析。「戦後レジームからの脱却」という政治的象徴を優先し、「実を捨てて名をとる」道を選んだと説く。

一方で三浦は、安全保障を日米同盟に依存しつつ、そこから目を背け、平和国家を掲げて必要な法整備を怠ったリベラル派の「欺瞞」を断罪。同時に、戦後日本の日陰者とされ「憎しみと倍返しの感情」に燃える保守派も危険視する。双方から一線を画し、戦後の成果を尊重しつつ戦後を乗り越える必要を強調する。

こうした議論は、従来の平和主義の立場からみれば違和感があるだろう。だが日米安保と憲法9条が併存する矛盾は、法案をつぶしても残存する。慶応大教授の小熊英二「安全保障についての議論を」（「社会運動」7月号）の指摘は重い。

大事なのは、日本の国家像を議論していくこと。その端緒をつくれるかどうかの方が、法案の行方より大きな問題だと小熊。戦後70年の日本に「必要な試練」だと三浦は言う。それぞれの言葉をかみしめたい。

（敬称略）

このほかの注目論文

「永井隆は己の如く人を愛したか」
斎藤貴男・ジャーナリスト
「世界」8月号
被爆地長崎で平和の尊さを訴えた「聖者」とされる永井隆博士の評価を再考。原爆投下を神の摂理と語って日米両政府を免責し、後の原発乱立を招いたと批判

「じっちゃんを取り戻す」
小田嶋隆・コラムニスト
「新潮45」8月号
安倍晋三首相の集団的自衛権や戦後70年談話への執着は、祖父の岸信介元首相への個人的な思慕に由来すると推察。公私混同や論理破綻を省みない幼さを憂慮

「目覚めよ！　東京圏の市民」
藻谷浩介・日本総合研究所主席研究員
「中央公論」8月号
人口減少による「地方消滅」が騒がれる陰で急速に進む大都市の高齢化をデータ解析。出生率が高く高齢者も元気な農山村への若者回帰が打開策になると説く

文学賞

◆講談社3賞に真並さん　第37回講談社ノンフィクション賞は、真並恭介さんの「牛と土」（集英社）に決まった。

第31回講談社エッセイ賞はジェーン・スーさんの「貴様いつまで女子でいるつもりだ問題」（幻冬舎）、第31回講談社科学出版賞は宮原ひろ子さんの「地球の変動はどこまで宇宙で解明できるか」（化学同人）が選ばれた。賞金はいずれも各100万円。贈呈式は9月17日に東京都内で開く予定。

「牛と土」は東京電力福島第1原発事故後の牛の殺処分をめぐって、牛を守ろうと苦労する牛飼いらの姿を描いたノンフィクション。

中上さんの戦争観探る　都内でイベント

文芸話題

作家の中上健次さん（1946～92年）が設立し、和歌山県新宮市で毎年夏に開催している市民講座「熊野大学」のプレイベントが、東京・池袋の書店で開かれた。中上さんの小説「鳳仙花」や、戦争と小説をテーマに、中上さんの長女で作家の中上紀さん、作家の柴崎友香さん、文芸評論家の市川真人さんの3人が意見を交わした。

トークイベントで意見を交わす柴崎友香さん㊨と中上紀さん＝東京・池袋の書店

「鳳仙花」は、中上さんの代表作「岬」「枯木灘」などの主人公・秋幸の母フサの半生を描く。中上さんの実母がモデルだ。

紀さんと柴崎さんは、15歳のフサが紀州の海や花を見つめる冒頭部分を朗読。柴崎さんは「フサさんが魅力的で、街のにぎわいも丁寧に描かれている」と語り、紀さんは花が好きだった父の逸話を披露した。

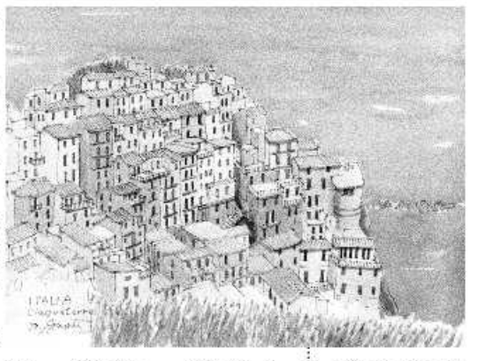
市川さんは、この作品が描く年代が戦前から戦後を縦断していることを指摘し、戦争に作家の役割とを話した。

今年の熊野大学のテーマは「戦後70年―中上健次　平和と戦争」。7日から9日にかけて新宮市内で開かれる。

話題は柴崎さんの小説「わたしがいなかった街で」に移った。現代の東京で暮らす女性が、時と時間を隔てた戦地を思う作品。柴崎さんは「反響が大きく、みな戦争のことを考えていながら、どう表せばいいのか分からないのだと分かった。戦争に至る経過や人々の生活がどうなのかを考えるとき、『鳳仙花』は興味深い作品」と語った。現在、戦争への危惧が高まっている。紀さんは「どんな小さなことでも、何らかの行動を起こすのが作家の役割」と話した。

美術展あんない　県内

〈1～16日開催分〉



江上寿夫「イタリア（リヴィエリア海岸）丘から」＝ギャラリー花杏豆で開かれる個展から

▽徳島青澄　第5回翔和会かな書作展（～2日、徳島市シビックセンター）16人の古筆の臨書など60点。

▽色鉛筆・パステル画2人展（～2日、板野町羅漢・ギャラリーカフェブリッサ）沢口恵一（鳴門市）と火口山孝（阿南市）の風景画や似顔絵約20点。

▽アトリエさん星展（～7日、よんでんエネルギープラザ阿南）児童、中高生、一般約30人が色彩豊かに描いたアクリル、水彩画約50点。

▽写真・西田茂雄塾「夏に恋して」写真展（～9日、あわぎんホール）現代工芸美術家協会の巡回作品69点と四国在住会員の28点。陶磁、染織、金属、人形、漆など。

▽第4回あとりえみのん絵画講座作品展（1日～10月31日、徳島市蔵本本町2・徳島大病院市民ギャラリー）葦手日登美（徳島市）と受講生13人が描いた人物、静物の水彩、油彩画15点。

▽江上寿夫　ヨーロッパ風景水彩画展（2～15日、徳島市八万町上長谷・ギャラリー花杏豆）江上（大阪府）がイタリア旅行で描いた20点。

▽八木和彦絵画・美術高越寺、棚田など60点。

▽第54回日本現代工芸美術展徳島巡回展（1～9日、あわぎんホール）現代工芸美術家協会の巡回作品69点と四国在住会員の28点。陶磁、染織、金属、人形、漆など。

▽第4回あとりえみのん絵画講座作品展（1日～10月31日、徳島市蔵本本町2・徳島大病院市民ギャラリー）葦手日登美（徳島市）と受講生13人が描いた人物、静物の水彩、油彩画15点。

▽江上寿夫　ヨーロッパ風景水彩画展（2～15日、徳島市八万町上長谷・ギャラリー花杏豆）江上（大阪府）がイタリア旅行で描いた20点。

▽八木和彦絵画・美術高越寺、棚田など60点。

▽剣山スーパー林道の四季写真展（7～9日、阿波銀プラザ）岡田忠雄（徳島市）が撮影した約60点。

▽第44回絵で見る徳島展（7～16日、あわぎんホール）ふるさとを描き遺す会の会員21人が描いた鳴門の渦や小松島港、高越寺、棚田など60点。

▽第13回徳島阿波踊り写楽風写真展（12～16日、阿波銀プラザ）藤本昭（徳島市）が撮影した約150点。

▽陶工房たにぐち　日々のうつわ展（12～31日、神山町神領・ギャラリー仙人）谷口裕志（上板町）のカップ、皿、鉢など新作80点。

▽写真クラブ・目　第27回作品展（16～23日、貞光ゆうゆう館）会員19人が自由なテーマで撮った35点。

▽飯原一夫絵画展　追憶の昭和徳島（～16日、徳島城博物館）飯原（徳島市）が戦争の悲惨さや戦後復興する徳島駅周辺の様子などを描いた約70点。

▽H@Lこてん―月と々のうつわ朝（5～16日、鳴門市撫養町木津・ギャラリーバンサン）大阪府在住の作家が郷愁を誘う心象風景をアクリル絵の具で描いた30点。

▽乾初枝写真展「花のある暮らし」（5～16日、板野町羅漢・ギャラ

【紙面編集】山下真佑

第56期　王位戦

白　組　プレーオフ

●九段　佐藤　康光
○六段　菅井　竜也

【第3譜】（図は●7九角まで）

持ち時間　各4時間
消費　●2時間38分　○1時間28分
指し手　25手

意表の引き角戦法

千日手指し直し局となった本局。前局の残り時間が両者とも1時間以上だったため、そのままの残り時間で指し継がれた。前局で1時間17分を消費した菅井は2時間43分。対して1時間53分を消費した佐藤は、2時間7分が本局の持ち時間となる。

午後2時52分、先後を入れ替えて指し直し局が始まった。先手の佐藤は初手に飛車先の歩を突き、角道を開けずに駒組みを進める。珍しい立ち上がりだ。

●7八銀～●7九角でベールを脱ぐ。飯島栄治七段が得意にしている引き角戦法である。くしくも隣の「棋峰」では飯島七段が対局している。

（内田晶）

【千日手指し直し局】
●2六歩113　○3四歩77
●4八銀3　○3二銀1
●5六歩2　○4四歩2
●7八銀3　○4三銀5
●7九角　○3三角
●2五歩3　○2二飛
●5七角　○6二玉1
●6八玉　○7二玉
●7九玉　○8二玉
●8八玉　○9二香
●3六歩1　○9一玉
●3七銀5　○5一角2
●4六銀28

（図は●4六銀まで）

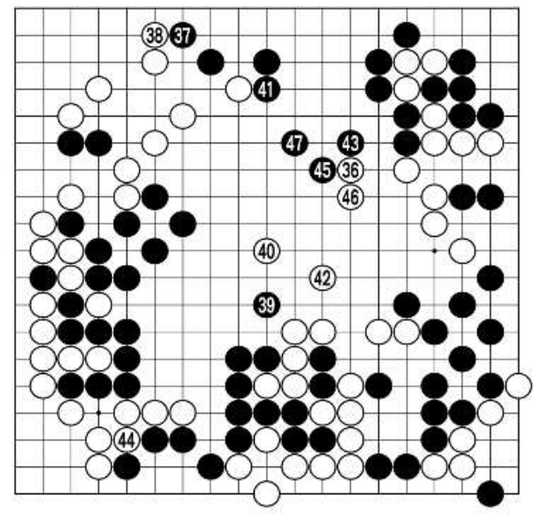
引き角戦法は対振り飛車用の作戦。角道を開けずに玉を囲うことで、後手の角筋の脅威を緩和できるのが大きい。

第41期　天元戦

2回戦局
第5局

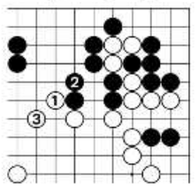
●七段　一力　遼
○三段　沼舘沙輝哉
（先番6目半コミ出し）

【第8譜】　136―147



持ち時間　各3時間
消費　●2時間42分　○2時間33分

参考図



一力のヨセ

白36は自身の補強と上辺の黒模様を消す大きなヨセ。黒37は権利で、白38までこうなるところ。格言で「ヨセは二線にあり」とある負どころとなる。

白40では先に41と押しておくのが普通だが、形勢不利な白としては少しでも形を決めたくない。

逆に黒の上辺がふっくらとした。一力のヨセは定評があり、そうそうミスは出ない。

（四段・竹清勇）

「白44は問題で参考図、白1のハネが最大のヨセでした。黒2にほとんど決まっているので、黒39から一般的にダメ場と言われる中央の境界線がどうなるか。そこが最後の勝負どころとなる。

黒45、47と打たれ、ように、大ヨセではまず辺からが基本だが、この碁は辺の形がすでに白3のカケツギで、白は中央がふっくらしま す。実戦との差は歴然としています」と三谷解説者。